ヤコブ原福音書

作者不詳
藤遥　制作

表題、1〜5章　ヨアキムとアンナの嘆きと、マリヤの誕生

0:1 聖なる神の母、イエス・キリストのいとも栄光ある母、マリヤの誕生。

1:1 イスラエルの十二部族の記録によれば、ヨアキムという、たいへんな金持ちがいた。彼はいつも、ささげ物を二倍にしてささげ、こう言っていた。「わたしの有り余る分は、民全体のためのものとなる。わたしの罪のゆるしのための分は、主のものとなり、わたしのためのあがないとなる」1:2 さて、主の大いなる日が近づき、イスラエルの子らが、自分たちのささげ物をささげていた。すると、ルベンがヨアキムの前に立って言った。「あなたが最初にささげ物をささげることは許されない。あなたはイスラエルの中で子をもうけなかったのだから」1:3 ヨアキムはひどく悲しんだ。そして、民の十二部族の記録のところへ行って言った。「イスラエルの十二部族の記録を調べてみよう。イスラエルで子をもうけなかったのは、わたしひとりなのか」調べてみると、正しい人々はみな、イスラエルで子をもうけていた。そこで彼は、族長アブラハムのことを思い出した。神は、アブラハムの晩年に、子イサクをお与えになったのである。1:4 ヨアキムはひどく悲しみ、妻の前に姿を見せず、かえって荒野に身を引いて、そこに天幕を張った。そして、四十日四十夜、断食をした。彼は心の中で言った。「わたしの神、主が顧みてくださるまでは、食べるためにも飲むためにも下りて行くまい。祈りが、わたしの食べ物となり、飲み物となるのだ」

2:1 さて、ヨアキムの妻アンナは、二つの嘆きの歌をうたい、二つのことで胸を打って悲しんでいた。彼女は言った。「わたしは、やもめであることを嘆こう。子のないことも嘆こう」2:2 主の大いなる日が近づいた。アンナのはしためユデテが言った。「いつまで、ご自分の身を悩ませておられるのですか。見てください、主の大いなる日が近づいています。嘆き悲しんではなりません。それより、この頭飾りをお受け取りください。仕事先の女主人が、わたしにくれたものです。でも、わたしがこれを頭に巻くことは許されません。わたしははしためですし、これには王家のしるしが付いているからです」2:3 アンナが言った。「わたしから離れなさい。わたしは、そんなことはしたことがない。それに、主がわたしの身を、ひどく悩まされたのだ。もしかしたら、悪がしこい者がおまえにこれを渡したのか。そして、おまえは、わたしを自分の罪の仲間にしようとして来たのではないか」ユデテが言った。「わたしが、あなたにどんなのろいをかけるというのでしょうか。主があなたの胎を閉ざされ、イスラエルの中であなたに実を与えないようにしておられるのですから」2:4 アンナはひどく悲しんだ。そして、喪の衣を脱ぎ、頭を洗い清めて、婚礼の衣を着た。午後三時ごろ、彼女は散歩をしようと、庭へ下りて行った。そこに月桂樹があるのを見て、その下に座った。そして、主なるかたに切に願って言った。「わたしたちの先祖の神よ、わたしを祝福し、わたしの祈りを聞き入れてください。あなたがサラの胎を祝福し、子イサクをお与えになったように」

3:1 アンナは天を見つめ、月桂樹の中に、すずめの巣があるのを見た。そこで、心の中で嘆きの歌をうたって言った。「ああ、だれがわたしを産んだのだろう。どんな胎が、わたしを生み出したのだろう。わたしは、イスラエルの子らの前で、のろいとして生まれたのだから。わたしはそしられ、人々はわたしをあざけって、主の宮から追い出した。3:2 ああ、わたしは何に似ているのだろう。わたしは空の鳥にも似ていない。主よ、空の鳥でさえ、あなたの前で子を生むのに。ああ、わたしは何に似ているのだろう。わたしは地の獣にも似ていない。主よ、地の獣でさえ、あなたの前で子を生むのに。3:3 ああ、わたしは何に似ているのだろう。わたしは、この水にも似ていない。主よ、この水でさえ、あなたの前で生き物を生むのに。ああ、わたしは何に似ているのだろう。わたしは、この地にも似ていない。主よ、この地でさえ、季節ごとに実をささげ、あなたをほめたたえるのに」

4:1 すると見よ、主の御使が現れて、アンナに言った。「アンナ、アンナ、主はあなたの祈りを聞き入れられた。あなたはみごもって、子を産む。あなたの子の

ことは、全世界で語られるであろう」アンナが言った。「わたしの神、主は生きておられます。男の子であれ女の子であれ、わたしが子を産んだら、その子をさささげ物として、わたしの神、主にささげます。その子は一生のあいだ、主に仕える者となります」4:2すると見よ、ふたりの御使が来て、アンナに言った。「見よ、あなたの夫ヨアキムが、群れを連れて帰って来る」主の御使がヨアキムのところへ下って来て、こう言ったからである。「ヨアキム、ヨアキム、主なる神はあなたの祈りを聞き入れられた。ここから下りて行きなさい。見よ、あなたの妻アンナはみごもるであろう[1]」4:3ヨアキムは下りて来た。そして、羊飼いたちを呼んで言った。「傷もしみもない雌の小羊を十頭、ここに連れて来なさい。それは、わたしの神、主のものとなる。また、柔らかい子牛を十二頭連れて来なさい。それは、祭司たちと長老たちのものとなる。そして、雄やぎを百頭。それは、民全体のものとなる」4:4すると見よ、ヨアキムが群れを連れて帰って来た。アンナは門のそばに立っていて、ヨアキムが来るのを見た。彼女は走り寄り、彼の首に抱きついて言った。「今こそわかりました。主なる神は、わたしを大いに祝福してくださいました。見てください、やもめだったわたしは、もうやもめではありません。子のなかったわたしが、みごもるのです」ヨアキムは、その最初の日を、自分の家で休んだ。

5:1翌日、ヨアキムはささげ物をささげながら、心の中で言った。「主なる神がわたしをあわれんでくださるなら、祭司の額の板が、わたしにそれを示すだろう」彼はささげ物をささげた。祭司が主の祭壇に上って行くとき、ヨアキムはその額の板に目を注いだ。すると、自分の中に罪を見なかった。ヨアキムは言った。「今こそわかった。主はわたしをあわれみ、わたしの罪をすべてゆるしてくださった」そして彼は、義とされて主の宮から下り、自分の家に帰った。5:2アンナの月が満ちた。そして、九か月目に[2]、アンナは子を産んだ。彼女は産婆に言った。「わたしは何を産んだのか」産婆が言った。「女の子です」アンナが言った。「わたしの魂は、この日、大いなるものとされた」そして、彼女は子を寝かせた。清めの日々が満ちると、アンナは身を洗い清め、子に乳を含ませた。そして、その名をマリヤと名づけた。

訳注

1 写本によっては『すでにみごもった』と読む。
2 写本によっては『七か月目に』『八か月目に』とする。

6〜10章　宮に入ったマリヤと、ヨセフ

6:1 幼な子は日ごとに強くなっていった。六か月になったとき、母は、立てるかどうかを試そうと、彼女を地面に立たせた。すると、彼女は七歩歩いて、母のふところに来た。母は彼女を抱き上げて言った。「わたしの神、主は生きておられる。主の宮に連れて行くまで、あなたは決してこの地を歩くことはない」母は自分の寝室に聖所を設けた。そして、清くないもの、汚れたものは、何一つ彼女に触れさせなかった。また、ヘブル人の汚れのない娘たちを呼んだ。娘たちは、彼女の相手をして遊ばせた。6:2 幼な子が一歳になったとき、ヨアキムは盛大な宴会を催した。そして、祭司たち、律法学者たち、長老たち、イスラエルの民全体を招いた。ヨアキムは幼な子を祭司たちに差し出した。祭司たちは彼女を祝福して言った。「わたしたちの先祖の神よ、この幼な子を祝福してください。すべての代にわたって名高い、永遠の名を彼女にお与えください」すると、民はみな言った。「そうなりますように、そうなりますように。アァメン」次に、ヨアキムは彼女を大祭司たちに差し出した。大祭司たちは彼女を祝福して言った。「いと高き所の神よ、この幼な子に目を留めてください。この上ない祝福、後に続くものがない祝福で、彼女を祝福してください」6:3 母は彼女を抱き上げ、寝室の聖所に連れて行って、乳を含ませた。そして、アンナは、主なる神に歌をささげて言った。「わたしの神、主に向かって、わたしは歌をうたおう。主はわたしを顧みて、敵から受けた恥を、わたしから取り除いてくださった。主は、ご自分の義の実をわたしにお与えになった。ただ一つでありながら、主の前に幾倍にも豊かな実を。だれが、ルベンの子らに告げるだろうか。アンナが乳を飲ませていると。聞け、聞け、イスラエルの十二部族よ。アンナが乳を飲ませている」アンナは、聖所の寝室に彼女を寝かせて休ませ、出て行って、客たちをもてなした。宴会が終わると、人々は喜びながら、イスラエルの神をあがめつつ下って行った。

7:1 幼な子は月を重ねていった。幼な子が二歳になったとき、ヨアキムが言った。「この子を主の宮に連れて上ろう。わたしたちの立てた約束を果たすためだ。そうしないと、主なるかたが災いを送られ、わたしたちのささげ物が受け入れられなくなるかもしれない」アンナが言った。「三年目まで待ちましょう。この子が父や母を恋しがらないように」ヨアキムが言った。「待とう」7:2 幼な子が三歳になったとき、ヨアキムが言った。「ヘブル人の汚れのない娘たちを呼びなさい。それぞれにともしびを持たせ、火をともしておかせなさい。この子が後ろを振り返らず、その心が主の宮から奪い去られないためだ」人々は、主の宮に上るまで、そのとおりにした。祭司は彼女を迎え、口づけして祝福して言った。「主は、すべての代にわたって、あなたの名を大いなるものとされた。終わりの日に、主はあなたによって、イスラエルの子らにご自分のあがないを現されるであろう」7:3 祭司は彼女を祭壇の三段目に座らせた。主なる神は彼女に恵みを注がれ、彼女はその足で踊った。イスラエルの全家は、彼女を愛した。

8:1 両親は、驚きながら、主なる神を賛美して下って行った。幼な子が後ろを振り返らなかったからである。マリヤは、主の宮で鳩のように養われ、御使の手から食物を受けていた。8:2 マリヤが十二歳になったとき、祭司たちは会議を開いて言った。「見よ、マリヤは主の宮で十二歳になった。では、彼女をどうしたらよいだろうか。主の聖所を汚すことになるかもしれない」そして、大祭司に言った。「あなたは主の祭壇の前に立つかたです。中に入って、彼女のために祈ってください。主があなたに示されることを、わたしたちは行いましょう」8:3 大祭司は、十二の鈴の付いた衣を取って至聖所に入り、彼女のために祈った。すると見よ、主の御使が現れて、彼に言った。「ザカリヤ、ザカリヤ、出て行って、民のうちのやもめ暮らしの男たちを集めなさい。それぞれに杖を一本ずつ持って来させなさい。主がしるしをお示しになる者があれば、彼女はその人の妻となるであろう」ふれ役たちは、ユダヤの地方一帯に出て行った。主のラッパが鳴り響き、人々はみな駆けつけた。

9:1 ヨセフは手斧を投げ捨てて、彼らを迎えに出て行った。人々は集まると、杖を持って大祭司のところへ行った。大祭司は、みなの杖を受け取って宮に入り、祈った。祈りを終えると、杖を取って外に出、それを彼らに返した。杖には、しるしがなかった。最後の杖を、ヨセフが受け取った。すると見よ、鳩が杖から出て来て、ヨセフの頭の上に飛んで来た。祭司がヨセフに言った。「あなたは、主のおとめを引き取って守る者に、くじで選ばれた」 9:2 ヨセフは言い返した。「わたしには息子たちがいますし、年寄りです。この人は若い娘です。イスラエルの子らの物笑いになりはしないでしょうか」祭司がヨセフに言った。「あなたの神、主を恐れなさい。神がダタンとアビラムとコラになさったことを思い出しなさい。彼らは言い逆らったために、地が裂けて、のみ込まれたのだ。今、ヨセフよ、恐れなさい。あなたの家にも、そのようなことが起こるかもしれない」 9:3 ヨセフは恐れて、彼女を引き取り、自分のもとで守った。ヨセフはマリヤに言った。「見よ、わたしは主の宮からあなたを引き取った。今、わたしはあなたをわたしの家に残して、建物を建てる仕事に出かける。また、あなたのところに帰って来る。主があなたを守ってくださるだろう」

10:1 さて、祭司たちは会議を開いて言った。「主の宮のために、幕を作ろう」祭司が言った。「ダビデの部族から、汚れのないおとめたちを呼んで来なさい」下役たちが出て行って捜し、七人のおとめを見つけた。祭司は、あの娘マリヤのことを思い出した。彼女はダビデの部族の出で、神の前に汚れがなかったのである。下役たちは出て行って、彼女を連れて来た。そして、おとめたちを主の宮に連れて入った。祭司が言った。「くじを引いて、だれが紡ぐかを決めなさい。金糸、汚れのない糸、亜麻糸、絹糸、青糸、緋糸、まことの紫糸だ」すると、まことの紫糸と緋糸がマリヤに当たった。彼女はそれを受け取って、自分の家に帰った。そのころ、ザカリヤは口がきけなくなった。ザカリヤが再び口をきくまで、サムエルが代わりを務めた。マリヤは緋糸を取って紡いでいた。

11〜15章　御使の告知と、ヨセフの苦しみ

11:1 マリヤは水がめを取り、水をくみに出て行った。すると見よ、声がして言った。「恵まれた女よ、おめでとう、主があなたと共におられる。あなたは女の中で祝福された者だ」マリヤは、この声がどこから来るのかと、右や左を見回した。彼女は震えながら家に帰り、水がめを置いた。そして、紫糸を取って自分の腰掛けに座り、それを紡いでいた。11:2 すると見よ、主の御使が彼女の前に立って言った。「恐れるな、マリヤよ。あなたは万物の主の前に恵みを得たのだ。あなたは、そのかたの言葉によってみごもるであろう」彼女はそれを聞いて、心の中で思い惑って言った。「わたしは、生ける主なる神によってみごもるのだろうか。そして、すべての女が産むように産むのだろうか」11:3 主の御使が言った。「そうではない、マリヤよ。主の力があなたをおおうであろう。それゆえに、あなたから生れ出る聖なる者は、いと高き者の子と、となえられるであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」マリヤが言った。「見てください。わたしは主の御前にあって、主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」

12:1 マリヤは紫糸と緋糸を仕上げて、祭司のところに持って行った。祭司は彼女を祝福して言った。「マリヤよ、主なる神はあなたの名を大いなるものとされた。あなたは、地のすべての代にわたって祝福されるであろう」12:2 マリヤは喜びにあふれて、親類のエリサベツのところへ行った。そして、戸をたたいた。エリサベツはそれを聞くと、緋糸を投げ出し、戸口に走って行って戸をあけた。エリサベツはマリヤを見ると、彼女を祝福して言った。「わたしの主の母上が、わたしのところに来てくださるとは、なんという光栄でしょう。見てください、胎内の子がおどって、あなたを祝福しました」マリヤは、御使のかしらガブリエルが告げた奥義を忘れていた。彼女は天を見つめて言った。「主よ、わたしは何者でしょうか。地のすべての代の人々が、わたしを祝福するとは」12:3 マリヤは、エリサベツのもとで三か月を過ごした。日ごとに、彼女の腹は大きくなっていった。マリヤは恐れて自分の家に帰り、イスラエルの子らから身を隠した。これらの奥義が起こったとき、彼女は十六歳[1]であった。

13:1 彼女は六か月目になった。すると見よ、ヨセフが建物を建てる仕事から帰って来た。ヨセフは家に入り、彼女の腹が大きくなっているのを見た。彼は自分の顔を打ち、地面の荒布の上に身を投げ出した。そして、激しく泣いて言った。「わたしは、どんな顔をして、わたしの神、主を仰ぎ見ればよいのか。この娘のために、何を祈ればよいのか。わたしの神、主の宮から、彼女をおとめのまま引き取ったのに、守りきれなかったのだから。だれがわたしをわなにかけたのか。だれが、わたしの家でこの悪を行い、おとめを汚したのか。アダムの物語が、わたしの身にくり返されたのだろうか。アダムが神をあがめていたとき、へびが来た。そして、エバがひとりでいるのを見つけて、だました。それと同じことが、わたしにも起こったのだ」13:2 ヨセフは荒布から立ち上がり、マリヤを呼んで言った。「神が心にかけてこられた者よ、どうしてこんなことをしたのか。あなたの神、主を忘れたのか。至聖所で育てられ、御使の手から食物を受けていたあなたが、なぜ身をおとしめたのか」13:3 彼女は激しく泣いて言った。「わたしは清いのです。男の人を知りません」ヨセフが彼女に言った。「では、あなたの胎内にあるものは、どこから来たのか」彼女は言った。「わたしの神、主は生きておられます。それがどこから来たのか、わたしは知りません」

14:1 ヨセフはひどく恐れた。そして、彼女から離れて黙り込み、彼女をどうしたらよいかと思いめぐらした。ヨセフは言った。「もし彼女の罪を隠せば、わたしは主の律法に逆らう者となる。もしイスラエルの子らに彼女のことを明らかにしても、わたしは恐ろしい。彼女の内にいるものは、御使によるものかもしれないのだ。そうなれば、わたしは罪のない血を死の裁きに引き渡す者となる。では、彼女をどうしたらよいのか。ひそかに、わたしのもとから去らせよう」そのうちに、夜になった。14:2 すると見よ、主の御使が夢でヨセフに現れて言った。

「この娘を恐れるな。彼女の内にいるものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」ヨセフは眠りから起きた。そして、自分にこの恵みをお与えになったイスラエルの神をあがめた。それからは、彼女を守った。

15:1 さて、律法学者アンナスがヨセフのところに来て言った。「なぜ、わたしたちの集まりに顔を見せなかったのか」ヨセフが彼に言った。「旅で疲れたので、最初の日は休んでいたのです」アンナスは振り向いて、マリヤの腹が大きくなっているのを見た。15:2 彼は大急ぎで祭司のところへ行って言った。「あなたが保証しておられるヨセフが、ひどく律法にそむきました」祭司が言った。「それはどういうことか」彼は言った。「ヨセフは、主の宮から引き取ったおとめを汚しました。ひそかに彼女と結婚して、イスラエルの子らに明らかにしなかったのです」祭司は答えて言った。「ヨセフがこんなことをしたのか」律法学者アンナスが言った。「下役たちを遣わしてください。おとめの腹が大きくなっているのが、わかるでしょう」下役たちは行って、彼の言ったとおりであるのを見た。そして、彼女をヨセフと一緒に法廷に連れて行った。15:3 祭司が言った。「マリヤよ、なぜこんなことをしたのか。なぜ身をおとしめ、あなたの神、主を忘れたのか。あなたは至聖所で育てられ、御使の手から食物を受けた。賛美の歌を聞き、主の前で踊った。そのあなたが、なぜこんなことをしたのか」彼女は激しく泣いて言った。「わたしの神、主は生きておられます。わたしは主の前に清く、男の人を知りません」15:4 祭司がヨセフに言った。「なぜこんなことをしたのか」ヨセフが言った。「わたしの神、主は生きておられます。わたしは、彼女のことでは潔白です」祭司が言った。「偽りの証言をせず、かえって真実を言いなさい。あなたはひそかに彼女と結婚し、イスラエルの子らに明らかにしなかった。また、力強い御手の下に頭を垂れなかった。あなたの子が祝福されるためであったのに」ヨセフは黙っていた。

訳注

1 写本によって十四歳、十五歳、十七歳とする。

16〜20章　あばきの水と、ほら穴での誕生

16:1 祭司が言った。「主の宮から引き取ったおとめを返しなさい」ヨセフは涙にくれた。祭司が言った。「わたしは、主のあばきの水をあなたがたに飲ませる。主は、あなたがたの罪を、あなたがたの目の前に明らかにされるであろう」16:2 祭司はそれを取って、ヨセフに飲ませた。そして、彼を山地へ送った。ヨセフは無事に帰って来た。祭司はマリヤにも飲ませて、山地へ送った。彼女も無事に帰って来た。民はみな、二人に罪が現れなかったので驚いた。16:3 祭司が言った。「主なる神があなたがたの罪を明らかにされなかったのだから、わたしもあなたがたを裁かない」そして、二人を去らせた。ヨセフはマリヤを引き取って、自分の家に帰って行った。彼は喜び、イスラエルの神をあがめた。

17:1 さて、アウグスト王から、ユダヤのベツレヘムにいる者はみな登録せよとの命令が出た。ヨセフが言った。「わたしは息子たちを登録しよう。だが、この娘はどうしたらよいのか。どのように登録したらよいのか。わたしの妻としてか。それは恥ずかしい。では、娘としてか。だが、イスラエルの子らはみな、彼女がわたしの娘でないことを知っている。主の日そのものが、主の望まれるとおりにするであろう」17:2 ヨセフはろばに鞍を置き、彼女を乗せた。彼の息子がろばを引き、ヨセフがあとについて行った。彼らは三マイルの所に近づいた。ヨセフが振り返ると、彼女は沈んだ顔をしていた。彼は心の中で言った。「たぶん、彼女の内にいるものが、彼女を苦しめているのだろう」ヨセフがまた振り返ると、彼女は笑っていた。彼は彼女に言った。「マリヤ、どうしたのか。あなたの顔が、笑っているかと思えば、沈んで見える」マリヤがヨセフに言った。「わたしの目に、二つの民が見えるのです。一つは泣いて、胸を打って嘆いています。もう一つは喜び、楽しんでいます」17:3 道の半ばまで来たとき、マリヤが彼に言った。「わたしをろばから降ろしてください。わたしの内にいるものが、生れ出ようとして、わたしをせき立てているのです」ヨセフは彼女をろばから降ろした。そして、彼女に言った。「どこへあなたを連れて行って、あなたの恥をおおえばよいのか。ここは寂しい所なのだ」

18:1 ヨセフはそこにほら穴を見つけ、彼女を中に入れた。そして、息子たちを彼女のそばに置いた。それから、自分は出て行って、ベツレヘムの地でヘブル人の産婆を探した。18:2 わたしヨセフは歩いていた。だが、歩いていなかった[1]。わたしが空を見上げると、空は驚きに打たれていた。天の極を見上げると、それは止まっていた。空の鳥も、じっとしていた。地に目をやると、鉢が置かれ、働き人たちが食卓についていた。彼らの手は鉢の中にあった。噛んでいる者は噛まず、取り上げる者は持ち上げなかった。口に運ぶ者は運ばず、かえって、みなの顔は上を見ていた。すると見よ、羊が追われていたが、前に進まず、かえって立ち止まっていた。羊飼いは、杖で羊を打とうとして手を上げた。だが、その手は上がったまま止まった。わたしは川の流れに目をやった。子山羊たちは、口をつけたまま飲まずにいた。すべてのものが、一瞬のうちに、その動きを止められていた。

19:1 すると見よ、ひとりの女が山地から下りて来て、わたしに言った。「もし、あなた、どこへ行くのですか」わたしは言った。「ヘブル人の産婆を探しています」彼女は答えて、わたしに言った。「あなたはイスラエルの人ですか」わたしは彼女に言った。「そうです」彼女は言った。「では、ほら穴で産もうとしているのは、だれですか」わたしは言った。「わたしのいいなずけです」彼女はわたしに言った。「あなたの妻ではないのですか」わたしは彼女に言った。「主の宮で育てられたマリヤです。わたしは、くじで彼女を妻として受けました。でも、彼女はわたしの妻ではありません。かえって、聖霊によってみごもっているのです」産婆が彼に言った。「それは本当ですか」ヨセフが彼女に言った。「来て、見てください」産婆は彼と一緒に出かけた。19:2 二人はほら穴の所に立った。すると見よ、輝く雲がほら穴をおおっていた。産婆が言った。「わたしの魂は、きょう、

大いなるものとされました。わたしの目が不思議なことを見たからです。イスラエルに救いが生れたのです」するとたちまち、雲はほら穴から退いていった。そして、大きな光がほら穴の中に現れた。わたしたちの目は、それに耐えられなかった。その光は少しずつ退いていき、ついに幼な子が現れた。幼な子は来て、母マリヤの乳房を吸った。産婆は叫んで言った。「きょうは、わたしにとって大いなる日です。この新しい光景を見たのですから」19:3 産婆はほら穴から出て行った。すると、サロメが彼女に出会った。産婆は彼女に言った。「サロメ、サロメ、あなたに話したい新しい光景があります。おとめが、その体には収まらないものを産んだのです」サロメが言った。「わたしの神、主は生きておられます。わたしが指を入れて、彼女の体を確かめないかぎり、おとめが産んだとは決して信じません」

20:1 産婆は中に入って、マリヤに言った。「姿勢を整えてください。あなたをめぐって、小さくない争いが起こっているのです」サロメは自分の指を、彼女の体に入れた[2]。そして、叫び声を上げて言った。「わたしの不法と不信仰は、わざわいです。わたしは、生ける神を試みてしまったのですから。見てください、わたしの手は火に焼かれて、わたしから落ちていきます」20:2 サロメは、主なるかたに向かってひざまずき、言った。「わたしの先祖の神よ、わたしを覚えてください。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブの子孫です。わたしを、イスラエルの子らの見せしめにしないでください。かえって、貧しい人々のもとに返してください。主よ、あなたはご存じです。わたしは、あなたの名によっていやしのわざを行い、その報いをあなたから受けてきました」20:3 すると見よ、主の御使が現れて、彼女に言った。「サロメ、サロメ、主はあなたの願いを聞き入れられた。手を幼な子に差し伸べて、抱き上げなさい。そうすれば、あなたに救いと喜びがあるであろう」20:4 サロメは近寄って、幼な子を抱き上げて言った。「このかたを拝みます。イスラエルに大いなる王が生れたのですから」すると見よ、たちまちサロメはいやされた。彼女は義とされて、ほら穴から出て行った。すると見よ、声がして言った。「サロメ、サロメ、あなたが見た不思議なことを、言い広めてはならない。幼な子がエルサレムに入るまでは」

訳注

1 写本によっては三人称で語る。この幻の段落を欠く写本もある。

2 写本によっては、指を入れたとは書かず『調べた』とする。

21〜25章　博士たちの訪れと、ザカリヤの死

21:1 すると見よ、ヨセフはユダヤへ出て行く支度をした。ユダヤのベツレヘムで、大きな騒ぎが起こった。博士たちが来て、こう言ったからである。「ユダヤ人の王としてお生れになったかたは、どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので、そのかたを拝みにきました」 21:2 ヘロデはこれを聞いて、不安を感じた。そして、下役たちを博士たちのもとへ遣わした。また、祭司長たちを呼び寄せて、問いただした。「キリストについて、どう書いてあるか。どこに生れるのか」彼らはヘロデに言った。「ユダヤのベツレヘムです。そう書いてあるのです」ヘロデは彼らを去らせた。そして、博士たちに問いただした。「生れた王について、どんなしるしを見たのか」博士たちが言った。「わたしたちは、ひときわ大きな星を見ました。その星は、これらの星々の中で輝き、それらの星を暗くしました。それで、星々は見えなくなったのです。こうして、わたしたちは、イスラエルに王が生れたことを知りました。そして、そのかたを拝みにきたのです」ヘロデが言った。「行って、探してくれ。見つかったら、わたしに知らせてくれ。わたしも行って、拝むから」 21:3 博士たちは出て行った。すると見よ、彼らが東方で見た星が、彼らの先に立って進み、ついに彼らはほら穴に入った。星は、ほら穴の上にとどまった。博士たちは、幼な子が母マリヤと共にいるのを見た。そして、自分たちの袋から贈り物を取り出した。黄金と乳香と没薬である。 21:4 彼らは、ユダヤに入るなとのみ告げを御使から受けた。それで、ほかの道を通って、自分たちの国へ去って行った。

22:1 ヘロデは、博士たちにだまされたと知って、怒った。そして、人殺したちを遣わして、言った。「二歳以下の幼な子たちを殺せ」 22:2 マリヤは、幼な子たちが殺されていると聞いて、恐れた。そして、幼な子を取って布にくるみ、牛の飼葉おけに置いた[1]。 22:3 エリサベツは、ヨハネが捜されていると聞いて、彼を連れて山地へ登った。そして、どこに彼を隠そうかと、あたりを見回した。だが、隠れる場所はなかった。エリサベツは、うめいて、大声で言った。「神の山よ、母を子と共に受け入れてください」エリサベツは、登ることができなかったのである。するとたちまち、山が裂けて、彼女を受け入れた。光が、彼らを照らしていた。主の御使が彼らと共にいて、彼らを守っていたからである。

23:1 ヘロデはヨハネを捜していた。そして、下役たちをザカリヤのもとへ遣わして、言った。「おまえの息子を、どこに隠したのか」ザカリヤは答えて、彼らに言った。「わたしは神に仕える者で、いつも主の宮に控えている。息子がどこにいるのか、わたしは知らない」 23:2 下役たちは帰って行って、これらのことをすべてヘロデに知らせた。ヘロデは怒って、言った。「あの男の息子が、イスラエルの王になろうとしているのだ」そして、再び彼のもとへ人を遣わして、言った。「本当のことを言え。おまえの息子は、どこにいるのか。おまえの血がわたしの手の内にあるのを、知っているのだから」下役たちは行って、これらのことをすべて彼に知らせた。 23:3 ザカリヤが言った。「あなたがわたしの血を流すなら、わたしは神の証人だ。主なるかたが、わたしの霊を受け入れてくださるのだ。あなたは、主の宮の入口で、罪のない血を流すのだから」夜明けごろ、ザカリヤは殺された。イスラエルの子らは、彼が殺されたことを知らなかった。

24:1 しかし、祭司たちがあいさつの時刻に出て行くと、いつもなら彼らを迎えるザカリヤの祝福がなかった。祭司たちは立って、ザカリヤを待っていた。祈りのうちに彼にあいさつし、いと高き者をあがめるためである。 24:2 彼が遅れたので、みな恐れた。そのうちのひとりが、思い切って中に入った。すると、祭壇のそばに、固まった血が見えた。そして、声がして言った。「ザカリヤは殺された。彼のあだを討つ者が来るまで、彼の血はぬぐい去られることがない」その人はこの言葉を聞いて、恐れた。そして、出て行って、祭司たちに知らせた。 24:3 祭司たちは思い切って中に入り、起こったことを見た。すると、宮の天井の板が泣き叫んだ。祭司たちは、上から下まで衣を裂いた。彼らは、彼の体を見つけず、かえって、石になった彼の血を見つけた。彼らは恐れて出て行き、ザカリヤ

が殺されたことを、民全体に知らせた。民のすべての部族がこれを聞いた。そして、彼のために悲しみ、三日三晩、胸を打って嘆いた。24:4 三日たってから、祭司たちは、彼の代わりにだれを立てるかを相談した。くじはシメオンに当たった。この人は、キリストを肉において見るまでは死ぬことはないと、聖霊の示しを受けていたのである。

25:1 わたしヤコブは、この物語をエルサレムで書いた。ヘロデが死んだとき、騒ぎが起こった。わたしは、エルサレムの騒ぎが静まるまで、荒野に身を隠した。そして、主なる神をあがめていた。そのかたが、この物語を書く賜物と知恵を、わたしにお与えになったのである。25:2 わたしたちの主イエス・キリストを恐れる人々に、恵みがあるであろう。栄光が世々限りなく、このかたにあるように。アァメン。

訳注

1 写本によっては、ここでエジプトへ行ったと書く。

ヤコブ原福音書

2026年11月23日版

著者　作者不詳

制作　藤遥

発行　christian-classics-jp

公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/protevangelium-of-james/

原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/protevangelium-of-james

全文を、ギリシア語原文（Γενννησις Μαριάς）からAIを使って翻訳しました。

訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。